

古代ギリシア文化研究所 2016 年度年次総会・研究会 報告要旨

第一報告 岡田泰介 (高千穂大学准教授)

OKADA, Taisuke (Associate Professor, Takachiho University)

「zeugitai と hoplitai——ソロンの census class と軍役 再考」

“Zeugitai and hoplites: A military dimension of the Solon's census classes revisited”

公職就任資格すなわち政治権力の配分を経済的能力にそくして規定したソロンの census classes は、同時に市民の軍役区分としても機能していたとされ、軍役負担能力と政治権力の配分とが連動していたというアリストテレス以来のテーゼの根拠の一つとなってきた。このテーゼには、近年、さまざまな角度から批判的な検討がなされている。本報告では、こうした研究動向をふまえつつ、zeugitai に対象を限定して、この census class と hoplites とを関係づけてきた三つの根拠、1) zeugitai の語源、2) Th.6.43; 8.24.2、3) thetes が hoplites の katalogos に登録されなかったこと、の再検討をおこなう。この検討をつうじて、社会経済的区分である zeugitai とアテナイ軍隊の一部門である hoplites とは本質的に別個のものであるとの仮説が示される。

第二報告 師尾晶子 (千葉商科大学教授)

MOROO, Akiko (Professor, Chiba University of Commerce)

「「ミレトス決議」新考——IG I³ 21 と Milet 6.3.1020」(仮題)

“The Miletus Decree Revisited: IG I³ 21, Milet 6.3.1020 and the Milesian-Athenian Relationship” (provisional)

「ミレトス決議」(IG I³ 21) の決議年代は、長らく前 450/49 年の決議と考えられてきた。今なお、この決議年代にもとづいたミレトス史、あるいはデロス同盟史に関する論考が少なからず発表されているものの、少なくとも碑文学者の間では、今日、「ミレトス決議」は前 426/5 年に成立したものであると考えられている。しかしながら、「ミレトス決議」が前 426/5 年の決議とされることで、アテナイとミレトスの関係史の叙述がどう変わるのか、ミレトスの内政史がどう描かれうるのか、といったことについては、現在までほとんど顧みられていない。

一方、1970 年代にミレトス周辺で発見され、長らく未公開であった「アテナイのシュングラフェイスによる決議」が、2006 年に Milet 6.3.1020 として公刊された。Milet 6.3.1020 の校訂者は、この決議は前 5 世紀にミレトスで刻まれたものとし、IG I³ 21 との関連を示唆する。

本報告では、「ミレトス決議」と Milet 6.3.1020 の関係を再検証するとともに、アテナイと

ミレトスとの関係史について新たな視点から問い直したいと思う。

第三報告 篠塚千恵子（武蔵野美術大学教授）

SHINOZUKA, Chieko (Professor, Musashino Art University)

「ルトロフォロスについて——器形、名称、ジェンダー」

“Loutrophoros: Shape, Name, Gender”

前 7 世紀頃から前 5 世紀末頃までアッティカで用いられたルトロフォロスは漏斗状の長い頸部と細長い胴体を特徴とし、2 本ないし 3 本の把手をもつ。本来の用途は婚礼の沐浴の水を入れる器で、婚礼用祭器だったが、葬礼でも使用され、とくに未婚のまま死んだ者の墓標陶器として用いられたと考えられてきた。器面に表される図像は主に婚礼と葬礼を主題としており、アッティカ特有の冠婚葬祭について知るための重要なイメージ資料とされてきた。近年、J・ベルゲマンがこの器形の名称と葬礼文脈での使用に関する従来の説に疑問を呈し、研究者の間に波紋が広がった。それはほんとうに未婚の死者を象徴する器なのか。把手の数の相違は何を意味するのか。本発表では、ベルゲマンの説を起点にして、19 世紀後半から始まるルトロフォロス研究の歴史をたどりながら、定説化していたこの器形の名称と葬礼における用途について再検討を行う。

第四報告 田中創（東京大学准教授）

TANAKA, Hajime (Associate Professor, The University of Tokyo)

「伝承される書簡と人物イメージ——ユリアヌスとリバニオスの書簡集を例に」

“Julian and Libanius in the Letters: Epistolography and Literary Tradition”

ローマ帝政後期に伝統宗教復興に尽力したユリアヌス帝や、彼と親交を深め、帝の死後にその事績を称えたリバニオスは、いわゆる異教徒としてその後のキリスト教化したローマ帝国や中世世界で理解されていった。しかし、その宗教的信条の異質さにもかかわらず、彼らの残した多数の著作はキリスト教世界の中で破棄されることなしに受け入れられ、現代にまで引き継がれていくことになった。彼らの作品が後代に継承・受容されていった過程については、これまでの研究で注目を浴びることは少なく、その結果、現代の研究者が歴史的なユリアヌスやリバニオスの姿を再構成するにあたって、時に後代のイメージが混ざり込んでしまうこともあった。

本報告では、ユリアヌスのイメージの歴史的変遷を素描した後、彼の書簡集を一つの題材にして、後代にどのように受容され、引き継がれていったのかを翻訳のあり方と写本上での史料の残り方をもとにして考察する。そして、リバニオスの書簡史料についても同様

の分析手法を利用することで、研究の新しい方向性を展望する。